

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 15 日現在

機関番号：43804

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20700480

研究課題名（和文） 適応の観点からみた野外教育プログラムにおける「自然」の意味

研究課題名（英文） A meaning of "shizen" in the outdoor education from the viewpoint of adaptation

研究代表者

遠藤 知里（ENDO CHISATO）

研究者番号：90400744

研究成果の概要（和文）：本研究では、野外教育プログラムの参加者が自然環境に対する身体的・心理的順応を経て適応に至る過程と、その経験が生き方態度や価値観に及ぼす影響を、発達段階に応じて検討した。幼児では「自立心」「協調性」「自己表現力」が、小中学生では「感情調整力」「前向き柔軟思考」「自然への感性」が、大学生では「前向き柔軟思考」が、それぞれ野外教育プログラムによって向上することが認められ、野外教育プログラムの教育的価値を示した。

研究成果の概要（英文）：In this study, we examined the effects outdoor education program that carried out under the outdoor setting on the physical and psychological adaptation. The main findings were as follows: 5-year-old children improved that self-reliance, cooperativeness, self expression. Elementary and junior high school students improved that emotional adjustment, positive flexible thinking, and sensitivity to nature. College students improved that positive flexible thinking. This study showed the educational value of outdoor education programs.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学（身体教育学）

キーワード：野外教育 適応 意欲 人間関係 自然環境

1. 研究開始当初の背景
自然環境を利用した野外教育プログラムの

意義は、自然そのものが有する健康増進効果
や精神安定効果もさることながら、「新しい

環境」に適應するための積極的な行動の機会が等しく与えられ、働きかけが成就して得られた適應感が何らかの心理的効果をもたらして意欲を喚起し、新たな課題への挑戦を可能することなのではないかと考えることができる。すなわち、「自然環境」と「人間関係」は野外教育の基盤ともいふべき要素であり、それらに対する「適應」の問題は、課題解決への意欲的取り組みへのレディネスにかかわる基礎的かつ重要な課題であるといえよう。ところで「適應」とは、周囲の環境に適合しながら個人の欲求を充足していくことであり、内的適應(主観的世界との調和)、外的適應(社会環境を含む外的環境との調和)の二つの側面がある。わが国において自己の問題を扱った野外教育の研究例としては、自己概念に注目した研究(渡邊・飯田, 2006 ほか)が多かったが、近年では体験内容そのものへの問題意識が高い。野外教育では体験の評価を自分の言葉で語る「ふりかえり」が重視されてきた。このような場面で言語化された体験内容を検討することは、日本での野外教育プログラムにおける自己の適應の過程を的確に表現しうる研究手法としての可能性を持つ。

2. 研究の目的

本研究計画は、子どもの「意欲(積極的に何かをしようと思う気持ち)」を育む身体教育活動として野外教育プログラムをとりあげ、「適應」の観点からその教育効果の解明をめざすものである。研究課題として、野外教育プログラムにおける(1)自然環境への適應過程の検討、(2)仲間集団への適應過程の検討、(3)適應経験の再構成過程の検討、の3点を設定する。得られた知見を総合し、野外教育プログラムの参加者が自然環境に対する身体的・心理的順応を経て適應に至るプロセスと、その経験がその後の生き方態度や価値観に

与える影響を発達段階に応じて検討し、自然環境を活用した野外教育プログラムの教育的価値を明示することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 野外教育プログラムにおける自然環境への適應過程の検討

海外と国内における自然環境の相違を念頭に先行研究の検討を行い、野外教育プログラム参加者の自然環境への適應プロセスに関する仮説を得る。その仮説を基礎として、野外教育プログラム指導者に対するインタビューを行い、そのデータを基礎として自然環境への適應と意欲の仮説の精緻化を行う。さらに、指導者に対するインタビューデータを追加することによって、幼児期、児童期、思春期、青年期の発達段階別の仮説へと発展させる。ここまでで得られた仮説の検証のために、各発達段階に応じた実証的手法を考案し、調査用紙の作成等の準備を行う。野外教育プログラム場面を研究の場とした調査を行い、適應感と意欲の仮説を検証する。ここまでの成果を総合して、各発達段階における適應から意欲へのプロセスモデルを提示する。

(2) 野外教育プログラムにおける仲間集団への適應過程の検討

海外と国内における文化的自己観の相違を念頭に先行研究の検討を行い、野外教育プログラム参加者の仲間集団への適應プロセスに関する仮説を得る。その仮説を基礎として、野外教育プログラム指導者に対するインタビューを行い、そのデータを基礎として仲間集団への適應と意欲の仮説の精緻化を行う。さらに、指導者に対するインタビューデータを追加することによって、幼児期、児童期、思春期、青年期の発達段階別の仮説へと発展させる。ここまでで得られた仮説の検証のために、各発達段階に応じた実証的手法を考案し、調査用紙の作成等の準備を行う。野外教

育プログラム場を研究の場とした調査を行い、適応感と意欲の仮説を検証する。ここまでの成果を総合して、各発達段階における適応から意欲へのプロセスモデルを提示する。

(3) 野外教育プログラムにおける適応経験の再構成過程の検討

野外教育プログラムへの参加経験者に対するインタビューを行い、研究課題1と研究課題2で得られたプロセスモデルを枠組みとして語りの内容を検討し、適応経験の再構成過程をモデル化して提示するとともに、事例研究的な論文としてまとめる。

4. 研究成果

(1) 研究のおもな成果

① 幼児期の野外教育プログラムの効果

本研究では、宿泊保育の効果について幼稚園教育要領における領域「環境」および「健康」の観点から考察を加えた。宿泊保育について、保護者は子どもの自立心、協調性、自己表現を高める効果を認め、子ども自身の主観においても自立心の高まりが認識されていることが明らかになった。領域「環境」、「健康」との関連では、日常の園生活の中で行われる内容との共通点が多く見受けられたが、それゆえに今後は宿泊保育でのみ達成可能な体験の価値を明らかにする必要性が示された。

表1 宿泊保育前後の自立心と協調性の変化

		宿泊保育前		宿泊保育後		t値
		平均		標準偏差		
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	
子ども自身の評価	自立心	16.07	2.43	17.40	2.10	4.13 **
	協調性	17.09	2.47	17.56	1.91	1.33 n.s.
保護者の評価	自立心	14.77	2.22	16.44	1.75	6.15 **
	協調性	15.30	2.48	16.28	2.40	3.45 **

** p<.01

表2 宿泊保育前後の子どもの様子の変化

(保護者による評価)

	宿泊保育前		宿泊保育後		t値
	平均		標準偏差		
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
自分の気持ちを言葉に伝えることが多い	2.88	0.78	3.18	0.71	3.19 **
幼稚園での出来事をよく話す	2.91	0.89	3.21	0.77	2.29 *
自然(動植物等)のことに興味を持っている	3.26	0.74	3.33	0.58	0.63 n.s.
自然の現象(星や花がきれい等)によく感動する	3.23	0.73	3.37	0.59	1.53 n.s.
ゴミの分別や資源の節約等、環境に興味がある	2.72	0.90	2.98	0.69	2.22 *

** p<.01 * p<.05

② 小中学生期の野外教育プログラムの効果

<自己成長性とレジリエンスの観点から>

本研究では、長期キャンプ参加者(小中学生)の自己成長性とレジリエンスの変化について、その特徴をみることを目的とした。自己成長性得点、レジリエンス得点、感情調整得点、状況打開意欲得点、前向き柔軟思考得点にキャンプ初日と最終日の差が認められ、キャンプ前後でキャンパーの自己成長性および精神的回復力が向上したと結論できた。

表3 キャンパーの自己成長性の変化

	キャンプ初日		キャンプ最終日		t
	M SD		M SD		
	M	SD	M	SD	
自己成長性全体	111.21	12.57	114.39	11.09	2.09 *
達成動機	29.55	5.41	30.79	4.60	1.75 †
努力主義	30.82	5.32	32.09	3.79	2.01 †
自信と自己受容	22.52	4.80	22.15	4.19	0.56 n.s.
他者のまなざしの意識	28.33	6.51	29.36	6.29	1.70 †

† p<.10 * p<.05

表4 キャンパーのレジリエンスの変化

	キャンプ初日		キャンプ最終日		t
	M SD		M SD		
	M	SD	M	SD	
レジリエンス全体	64.54	13.17	68.83	9.53	3.13 **
感情調整力	21.05	5.22	22.54	4.01	2.12 *
状況打開意欲	22.27	5.00	23.56	3.71	2.58 *
前向き柔軟思考	13.39	3.56	14.66	2.58	2.82 **
援助活用志向	7.83	1.84	8.07	1.65	1.04 n.s.

* p<.05 ** p<.01

<自然への感性の観点から>

本研究では、長期キャンプ参加者の自然体験

効果および感性への効果の表れ方がキャンパーの志向によって異なるかどうかを検討し、キャンパー理解とプログラム開発に資する視点を提示することを目的とした。自然体験効果では「自然への感性」因子の得点の、感性については感性全体と全ての因子の得点の増加が認められたこと、自然体験効果の変化量については、つながり志向パターンによる差異が認められたこと、感性の変化量については、つながり志向パターンによる差異が認められなかったことから、今回の調査では、キャンパーの志向によって効果の表れ方が異なるかもしれないということを示唆する結果が得られた。

表5 キャンプ初日と最終日の自然体験効果の比較

	キャンプ初日		キャンプ最終日		t
	M	SD	M	SD	
自然体験効果全体	83.69	15.57	86.03	18.45	1.51
自己判断力	24.49	4.59	25.03	5.02	1.07
自然への感性	20.05	4.36	21.59	5.09	2.96 **
リーダーシップ	11.54	3.95	11.92	4.36	0.96
対人関係スキル	10.54	3.07	10.74	3.15	0.68
自己成長性	17.08	4.32	16.74	4.72	0.69

表6 キャンプ初日と最終日の感性の比較

	キャンプ初日		キャンプ最終日		t
	M	SD	M	SD	
感性全体	75.92	20.11	89.21	20.36	6.94 **
事象の背景・つながり	32.44	9.85	38.87	11.24	4.69 **
自然	13.90	4.33	15.79	3.97	4.82 **
人間	14.87	4.50	18.08	4.31	3.32 **
生命	14.72	4.18	16.46	3.36	5.68 **

③青年期（大学生年代）の野外教育プログラムの効果

本研究は、キャンプ指導者・養成講習会参加者（大学生年代）の自己成長性とレジリエンスの変化について、その特徴をみることを目的とした。自己成長性のうち達成動機得点にのみキャンプ初日と最終日の差がみとめられた。

表7 大学生キャンプ指導者の自己成長性とレジリエンス

	キャンプ初日		キャンプ最終日		z
	M	SD	M	SD	
	n=8				
自己成長性全体	100.88	13.12	97.75	14.12	1.69 †
達成動機	24.63	5.97	23.13	6.64	1.98 *
努力主義	29.50	4.54	28.50	4.24	1.21 n.s.
自信と自己受容	21.88	6.15	22.00	4.72	0.11 n.s.
他者のまなざしの意識	24.88	4.61	24.13	5.03	1.17 n.s.
レジリエンス全体	59.50	10.99	60.88	10.95	0.95 n.s.
感情調整力	20.00	4.21	19.63	4.27	0.74 n.s.
状況打開意欲	20.25	3.45	20.88	3.98	1.13 n.s.
前向き柔軟思考	11.63	3.46	12.50	2.93	1.84 †
援助活用志向	7.63	1.19	7.88	1.13	0.82 n.s.

* p<.05 † p<.10

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

今回の研究成果は、野外教育を専門領域とする学術団体が主催する、野外教育関係の研究者が参集する研究集会で発表したため、国内の研究者には研究成果を公開できている。

(3) 今後の展望

この一連の研究により、「未知の環境」に適応するための積極的な行動の機会が等しく与えられ、働きかけが成就して得られた適応感が何らかの心理的効果をもたらして意欲を喚起し、新たな課題への挑戦を可能にするという枠組みが、仮説として導かれた。「自然環境」と「人間関係」は野外教育の基盤ともいうべき要素であるが、それらに対する「適応」の問題は、課題解決への意欲的取り組みへのレジリエンスにかかわる基礎的かつ重要な課題である。今後、新規課題として取り組んでいきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

遠藤知里 (2010) : 幼稚園における夏季宿泊保育の意義; 領域「環境」・「健康」との関連からの考察. 常葉学園短期大学紀要, 第41号,

121-127.

〔学会発表〕（計 3 件）

遠藤知里, 杉山絵美, 太田正義(2009):長期キャンプ参加者と指導者の内面的成長について考える(1). 第 13 回日本キャンプ会議, 平成 21 年 5 月 23 日, 国立オリンピック記念青少年総合センター(東京).

遠藤知里, 櫻井良樹, 太田正義(2009):長期キャンプ参加者と指導者の内面的成長について考える(2). 第 12 回日本野外教育学会, 平成 21 年 7 月 4 日, 北海道教育大学釧路校(北海道).

遠藤知里・針ヶ谷雅子・太田正義(2010):キャンパーの志向によるキャンプの効果の表れ方の違い～つながり志向性・自然体験効果・感性の関係からの考察. 第 14 回日本キャンプ会議, 平成 22 年 5 月 22 日, 国立オリンピック記念青少年総合センター(東京).

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

遠藤 知里 (ENDO CHISATO)

常葉学園短期大学保育科・講師

研究者番号：90400744

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし